

學界餘滴

中國實體調查

根岸 侖



僕が和歌山縣中學校に居つた頃、確か明治二十三年（一八九〇年）と覺ゆるが、荒尾精氏の清國講演を聞いた。同氏は清國の現状より説き起し、その國際特に日本關係に移り、遂に日清

貿易の重要性に及んだ。言言肺腑より出て、滿場を酔はしめた。僕は生れて以來未だ曾てかくの如き雄辯に接したことがない。荒尾氏は軍人出身であるが、一生を中日親善に捧げるため、軍職を辭し、清國に渡つた。蓋し中日親善の實を擧げんには、先づ兩國の經濟提携を圖るべく、兩國の經濟提携を圖るには、貿易振興より着手しなければならぬ。彼は同志の根津一氏と謀り、日清貿易研究所を上海に創めんとし、學生募集のために、府縣遊説の途次、吾が中學に於て講演したのである。僕は研究所に入りたかつたが、種々の事情があつたので断念した。

僕は明治三十二年（一八九九年）高等商業學校本科を卒業し、専攻部に入り、貿易科に屬し、中日貿易を研究した。研究資料を得るため、當時創設せられた東亞同文會に出入した。該會は中日親善の標象として、同文を以て會名と爲し、近衛篤磨氏を會頭に、根津一氏を幹事長とした。根津氏と荒尾氏とは、異體同心であつて、世上往々荒尾氏を以て根津氏の上にあるとしたが、僕は根津氏が優つてゐたやうに思ふ。近衛氏は明治天皇の殊遇を辱ふし、青年ボン大學に學び、歸朝の後貴族院議長に任ぜられ、學習院院長を兼ね、朝野の重望を負ふた。夙に中日親善を圖つたが、中國々運の岌々たるに顧み、ジョン、ヘイ氏の提議に照らし、中國保全を以て同文會の綱領とし、その實現に邁進した。従つて清國上下より非常の信頼を博し、拳匪の亂後該土に漫遊したとき、至る所歓迎せられ、道教の本山たる北京の白雲觀に於てその不老長生の祈禱を行つたと傳へられる。近

衛、根津、荒尾の三氏は日本の對華關係者間に於て、その先覺者として三尊と崇められてゐた。僕は近衛氏の隨員として、渡清する旨新聞に書かれたが、その實同氏に先ち三十三年（一九〇〇年）末研究資料蒐集のため、獨自中國に入つたものであつて、亂後のことゝて殆んど得る所なく歸朝した。そのとき根津氏から東亞同文書院教授に内定してゐることを告げられた。

東亞同文書院は、同文會が日清貿易研究所に倣ひ設立したものであつて、根津氏をその初代の院長とした。僕は上海に赴任した後、單に中日貿易ばかりでなく、中國經濟全般に互り研究せんと考へた。當時日本知識階級の渡清するものは概ね政治外交にのみ關心を有する維新志士張りのものであつて、經濟研究に志すやうな唐變木は稀れであつた。駐華公使小村壽太郎氏は志士の多いのに呆れ、『君等は天下の風雲のみを望まないで、チット地上の實業を眺めてはどうか。』と云つた。當時日本人の中國に關する著書は多かつたれども經濟に屬するもの少なく、その觀るべきものとしては、日清貿易研究所の清國通商綜覽、仁禮敬之の北清見聞録、樞原陳政の清國商況視察復命書等あるに過ぎなかつた。何れも主として實地調査に據つたもので、信頼し得べきものであるが、畢竟、軍人や漢學者の餘技に成つたに過ぎぬ。中華には載籍極めて多いが、我等の所謂經濟に關する専門書に乏しくまた不學の僕にとりこれ等から經濟資料を發見することは容易でなかつた。かの財政の如き、清代に於て比較的詳細に歲出入數を擧ぐるものは李希聖の光緒會計錄に始ま

るのである。明治三十五年（一九〇二年）僕は李氏を北京に訪ひそれにつき質問を試みた。李氏の答辯は不得要領であり、またしきりに會談を避け、別に資料を持合せぬとのことであつた。後で聞いた所に據るに李氏はかの著書のため譴責せられたとのことだ。某公使館の通譯官は正確なる數字を知らんと欲し、戸部即ち大藏省の係官を懐柔し、原簿につき歲出入總表を寫眞にとつたことがある。それとても實數であつたかどうか判らぬ。パーカー氏は戸部から列國に提出した歲出入表に信を置かず、之を修正してゐる。重要な財源たる地租の臺帳はインチキ會社の如く二重帳簿であり、地租の徴收に當る社書なるものが、別に手控帳を持つてゐる。官文書さへも信頼し難きこと斯の如しだ。それで僕は中國經濟なるものは實地調査に待たなければ真相を詳知すること出来ないとの結論を得た。當時中國は祕密の幕に覆はれ、その幕を以て自家防衛の壘とする傾さへあつたので、調査に困難を來たした。中國商店につき調査せんに、人的信用を重んずる彼等のことゝて、未知の外人に對し、胸襟を開くべき筈なく、加ふるに片言の華語に、怪しげな漢文を交へ、僅かに意を通ずる程だから、其要領を得られないこと當然である。邦人にあつては中國通を以て任ずる大小の天狗も多いが眞に中國を知るもの少く、中國を知るものも容易に教へて呉れず、往々『我等は多年の經驗と失費とにより知り得たものをザラに教へられるか。』と放言する。三井洋行は中國商場に精通するもの多いことを矜りとしてゐた。嘗てその行員丹羽義次氏

に請ふて學生に中國錢莊のことを講演して貰つたことがある。そうすると行内に『丹羽はけしからぬ。洋行の祕密を漏らした。』との批難が起つた。かゝる始末だから僕の實地調査は何の役にも立たず別に便法を考へなければならなくなつた。

僕は在學中、中日貿易を専攻したが、その實中國商場につき何も知らなかつた。それを知るには専門家につき教を受けることが捷徑である。それで上海董家渡にある米問屋の支配人周廉生氏に教を請ふた。嘗て商業實踐科で習つた知識を利用し、上海商事情習を聞き質し、その商場に使用する汎ゆる書式を集めて貰い、中國簿記の附け方、商業書翰の書きやうに至るまで詳細に教へてもらつた。これが爲め上海商場につき些少の知識を得たけれども、中國經濟と云ふものから見ると、僅かに九牛の一毛を會得したに過ぎない。従つて僕は根津院長に向ひ學生を動員し、中國經濟を調査すべきことを建策し、その快諾を得た。該方法は上級學生を部署し、上海、蘇州、杭州、漢口、北京、天津に於ける商業慣習を始め、諸股の經濟事情を調査せしめたのである。これで略ぼ開市場の状況を知ることが得たが、内地に至つては、リヒトホーヘン、コフシシ、リットン諸氏の旅行記に依るのでなければ判からなかつた。是に於てか更に規模を擴大し、夏季休暇に乘じ、學生を十數班に別ち、每班數人づつ道分ちて内地に入り十八省の經濟事情を踏査すべきことを進言し、これまた院長の贊成を得、特にその經費として一萬元を支出せられることになつた。之を行ふと數年中國の名

都、大邑、主要の國道など殆んど歴訪せざるものなく、その報告書積んで十餘萬枚に達した。明治四十年其一部を補修し、之を中國經濟全書と名づけ、十二輯を公刊した。その後同文會はそれに基づき更に中國省別全誌十八巻を出版した。中國未知の經濟分野を開拓した功あるべきも、何分少額の經費に依る學生の調査のことなれば、觀察深からず、遺漏も亦少なくなき、恐らく正鵠を失したのもあるべく、資料の爲めに、資料を蒐集した嫌さへあるを免れなからう。僕の希望、即ち實地調査に依り、正確且つ豊富なる經濟資料を集め、文獻と照らし合せて究明を遂げ、中國特有の學術的理論を發見せんとするに副はないから、別案を考慮せなければならぬ際、明治四十年（一九〇七年）南滿洲鐵道會社理事兼調査部長岡松太郎氏から調査主任たらんことを求められた。

岡松氏は京都大學の教授であつて、明治大正に互り、日本法學界の泰斗と仰がれ、臺灣民政長官後藤新平氏から、臺灣舊慣調査會の委員を囑託せられ、臺灣私法の調査研究を擔當した。後藤氏の臺灣統治の方略を聞くに、平目は到底鯛にはなれぬ。臺灣人を日本人化することは出来ない。臺灣の美風民俗を害することなく、日本の文物制度と融合せしめ、臺灣の實狀に即し、しかも時勢に適した政治を行ひたいとのことだ。それで先づ臺灣の舊慣を調査せんとし岡松氏に私法の研究を委託した。岡松氏は周密なる計畫の下に専門家を部署し、金と時とを惜まらず、總督府の權威さへ用ひ、廣く資料を蒐集し、細かに之を検

討せしめ、自ら筆を執り書卸したのが有名な『臺灣私法』である。これは僕が殆んど中國經濟に於て爲さんと欲することを法律に於て爲したものだ。當時世界に於て未だ此種の著書なかつたので名聲噴々たるものがあつたが恐らく今日に於ても猶ほ有數の大著であらう。僕の如き不學のものが喙を容るべき限りでないが、資料を主として閩粵人の植民地たる臺灣に求め、しかも所論廣汎に過ぎ、少しく精細を缺く部分あり、稍、西洋學說の型に當て嵌めた嫌あるやに思はれる、これしかしながら岡松氏として勢い已むを得なかつたものであつて、僕の蜀望たるに過ぎぬ。後藤氏は『臺灣私法』を始め舊慣調査會の報告などを參酌し、豫ての抱負を實行し、異常の政績を挙げた。凡そ日本の國外に於ける施政は何れも皆住民の恨を買はないものないにも拘らず、臺灣人のみが獨り長く日本を謳歌したもの、後藤氏の力に待つもの大なりと言ふべきだ。後藤氏が初代の南滿洲鐵道會社總裁に拔擢されたとき、臺灣の實績に顧み、社内に調査部を置き、岡松氏を部長に任じた。僕は岡松氏の招を受けたので、宿望を達する此機にありとしたが、種々なる事情に依り、之を辭退した。

僕は明治四十年の夏歸朝したが、従前の希望を抛つことなく、都合をつけて中國に渡つたが、一地に落ち付き心ゆくばかり調査する暇がなかつたので、勞徒らに多く、功甚だ少なかつた。昭和十年東亞研究所と南滿洲鐵道會社とが合同して中國の農村商事の兩慣行を調査研究することになり、滿鐵は現地に就

き實體調査を爲し、東研はその報告に基き學術研究を爲すと云ふやうに各々事業を分擔した。東研側では東大法學部及京大經濟學部の諸教授に委員を囑託し、調査の指導と報告の研究を依頼した。又滿鐵側では一方北京を基地とし、河北山東兩省につき模範村を選び、社員を常駐せしめ、農村慣行を調査し、他方上海を本據とし、隨時社員を分遣して揚子江デルタ地帯に於ける都市の商慣行を調査した。若し此事業が成功すれば中國の經濟、法制、乃至社會の實體が判明し、中國特有の經濟的、法律的社會的原則なるものも亦發見さるべき見込あるのだ。幸に僕は委員に推擧せられ、初め専ら商事を分擔したが、後農村をも兼ね、正確且つ豊富なる資料に基き、碩學の驥尾に附し、研究し得ることになつたので宿望の達成遠きにあらざると大に喜んだ。併し中國は廣大である。全體を調査することは不可能だ。一部を調査し全般を察知する方法を探らねばならぬ。それは一縣を調査することである。縣は中國最古最下の行政區であつて、その面積約日本の縣の四分の一ばかり、中央政府の汎ゆる機構をそのまゝ茲に移してあること恰も徳川時代の藩に似てゐる。中國人民も亦皆籍を茲に置き、之を墳墓と地とし、其他郷を出づるもの同縣の縁に依りギルドを結成するなど、縣を社會生活の基本としてゐる。縣は正に中國の縮圖だから、縣さへ調査すれば、略ぼ中國を察知し得べき筈だ。僕は此意見を委員會に提出したが、各位の容れる所とならず、又本事業は一代の盛舉であつて多大の成績を收めたけれども、太平洋戰局の不利な

るため、中途にして挫折し、僕の宿望は遂に空しかった。斯の如く五十年に亙り、僕は自らの才と學とを量らず、徒らに調査研究範圍を擴大し、空しく東西に奔走し、何等成す所なかつた。幸に最近半世紀間に内外人に依り、中國の實體調査大に行はれ、その文獻の究明も亦頗る進んだから、その信頼し得べきものを選んで研究すれば、西洋學術の型に嵌めぬ、中國特有の學術理論を發見するは、必ずしも難くなからう。僕もまた失望すべき理由なく、今からでも決して遅くなからう。

執筆者紹介

石川 滋氏 時事通信社外信部勤務
 内田 直 作氏 成城大學教授
 村松 祐 次氏 東京商科大學助教
 大平 善 悟氏 東京商科大學教授
 野々村 一雄氏 東京商科大學助教
 根岸 信氏 元東京商大教授 經濟學博士

お詫び

本號掲載豫定の増淵龍夫氏の原稿「ウィットフォーゲルの近業について——『遠代社會史(九〇七—一二五)』を中心として——」は四百字詰三十四枚の力作を學界消息として頂戴いたしました。出版社において原稿を紛失いたしましたため、ここに掲載することができなかつたことを執筆者に對し深くお詫びいたします。目下極力さがしておりますから見付かり次第再び本誌に掲載する豫定で御座います。

なお、野々村一雄氏の「アメリカのソ連研究」は三月號(特集アメリカ研究)に掲載豫定のところ、編集の都合上今月號に繰越されました。併せて執筆者の御諒恕を乞う次第であります。

編輯部